



プロスペクティブな論文誌の編集を目指して

ヒューマンインタフェース学会 論文誌委員会 委員長
岡田 美智男

「不完結な言葉は内的説得力を持つ」、対話の哲学者と呼ばれるミハイル・バフチンの言葉である。他者の内的説得力のある言葉は、自己の言葉と絡み合う。そして、私たちは他者の言葉が響きあう中で育つという。言葉にも、私たちの中に響いてくる言葉とぜんぜん響かない言葉とがあるように、日頃、私たちが目にする論文にも、響いてくる論文とまったく響いてこない論文とがある。論文誌の編集に携わりながら、「他者に影響を与えるような、真の対話を引き出すような論文とはいったいどのようなものなのだろう」と考えることがある。

人を評価することと同様に、研究成果の評価は難しい。それは常に公正さを要求されるものであり、成果や業績としての完成度も求められる。新規性、有用性、信頼性を満たした、文句のつけようのない立派な業績がある一方で、そうした指標をクリアしながらも、何か私たちの中に響いてこない論文も多い。あるいは、面白い論文なのだけれど、残念ながら新規性、有用性、信頼性のいずれかを満たさず、差し戻されるものもある。評価指標を満たしながらも響いてこない論文、残念ながら評価指標を満たしてはいないものの、何か響いてくる論文。果たして、どちらが評価されるべき研究成果なのだろう。そんなジレンマをいつも感じる。

このジレンマはどこから生じるのだろうか。「不完結な言葉は内的説得力を持つ」というバフチンの言葉にヒントがありそうである。自己完結した論文と自己不完結な論文。「不完結な」という言葉は誤解されやすいけれど、それは外に開いた論文、他者との真の対話を引き出す論文という解釈もできる。あるいは、その有用性の評価を読者に委ねたような論文、あるいは将来の可能性に委ねたような論文である。一方、自己完結した論文とは、著者の中で評価を閉じてしまったものという意味にも解釈できる。ローカルなところで自己完結しすぎると、論文としての体裁は整いつつも、少し迫力のない論文に陥りやすい。それは他者の心に響かない、あるいは他者との対話を引き出さない論文となりやすい。

私たちの言葉は他者に投げかけることで、はじめてその意味や価値がたち現れる。その意味で、私たちの言葉、あるいは論文もまた本質的に「不完結さ」を備えているといえるだろう。自分の中に閉じた形でその価値や意味を完結させることができない。むしろ、やや不完結さを備えつつ繰り出された言葉のほうが他者と絡み合う余地を残している、他者に影響を与える可能性を残しているといえる。論文もまた同様だろう。それが誰かの心に響くものであって、次の仕事に影響を与えるものならば、積極的に評価されるべきものであると考える。

論文誌は、自己完結した有用な知見を後世に残していくという役割と同時に、将来にその判断を委ねる、世の中に広く評価を仰ぐための手助けをするような役割をあわせ持っているといえる。自己完結した論文を過去に得られた知見を振り返って参照するための「レトロスペクティブな論文」と呼ぶならば、他の研究者を巻き込み、様々な形で触発していくような潜在的な価値を備えた論文、将来にその評価や実証を委ねた論文を「プロスペクティブな論文」と呼ぶことができるだろう。

今年度、論文誌編集委員会では論文の査読ガイドラインについて幅広く見直しを進めている。その議論の中心は、ヒューマンインタフェースの研究の特質にあわせた、ユニークな評価基準を探ることにある。また、従来の「一般論文」枠に加えて、プロスペクティブで未来志向の論文を扱う「プロスペクティブ研究論文」枠の創設に向けた議論を進めている。そこでのポイントは「面白い、私たちの心に響いてくる論文を積極的に評価する」ということである。その評価においては「査読者の主観的な評価を許容する」とこととし、将来性のある、面白い、斬新な論文であって、「査読者を主観的に納得させる論文」「一読して査読者をうならせる論文」を積極的に取り上げたいと考えている。まだ、導入段階にあるものの、私たちはこうした論文誌編集の試みを、ぜひ将来に委ねてみたい。会員の皆さんからの斬新で、面白い、将来を志向した論文の投稿をお待ちしたい。